インド密教から見た空海教学

種　村　隆　元

１．はじめに

言うまでもなく空海の教学・実践の体系は、その壮大さの点において他の追随を許さないものがある。その一方で、空海の教学・実践の個々の要素を見ていくと、ここかしこに「インド密教的な要素」が見られるのも事実である。この「インド密教的要素」はもちろん空海とインド密教との「直接のつながり」を示すものではない。しかしながら、このような「インド密教的要素」の検討は、空海の教学・実践体系の独創性を描き出すためには必要な作業であるとも考えられる。

本小論は、空海教学・実践に見られるインド密教的要素の検討を通して、空海を仏教史上に「位置づける」ことに少しく貢献しようとするものである。

２．タントラの興隆と密教

まず、空海による教学・実践体系に話を進める前に、タントラの宗教と密教について簡単に見ていきたい。

紀元５世紀から13世紀は、インドにおいては中世初期（early medieval period）にあたる。この時期のインド世界（そして、インド文化が影響を与えた地域）における諸宗教を特徴づけるものは、その「タントラ化」である。タントラの宗教の特徴は、マントラ、ムドラー、マンダラなどを使用した、秘儀的、儀礼的な性格を有する実践にある。タントラの宗教は、自分たちの宗教の聖典に説かれている、このような実践に従うことにより迅速に解脱や超自然的な力の獲得という目的に達することをう

たっている。そしてそれにより、自らの実践体系を既存宗教の実践体系よりすぐれたものであることを主張したのである。

このタントラの宗教のうち、もっとも優勢であったのがシヴァ教であり、密教の実践体系はシヴァ教のそれの影響を大きく受けている。タントラの宗教の伝播した地域は、南アジアにとどまらず、東南アジア、東アジア、チベット・ヒマラヤ地域、モンゴルなどの広範囲に渡っている。密教を含むタントラの宗教は、南アジアから極東にいたるまでの地域における「国際的な」宗教であったのである。

一例を挙げると、真言宗の所依とする『金剛頂経』は、８世紀から10世紀にかけて、南アジア、チベット、インドネシア、東アジアの広範囲において、同じテキスト伝統にもとづく実践が行われていたことが、経典、儀礼マニュアル類、碑文等から明らかになっている（種村2016a）。密教は決してインド→中国→日本という三国伝来のものではなく、面として広がっていたのである[1]。

さらに、空海が活躍した時代は、空海も含めて密教経典に対する最初期の註釈者が現れた時期でもある。

３．密教の包括主義

タントラの宗教の特徴の１つとして、その包括主義を挙げることができよう。タントラの宗教は既存の伝統的宗教を排除するのではなく、それを自らの宗教の下位分類に組み込むことになる。例えば、シヴァ教の中で最も穏健的なシッダーンタという宗派では、入門者は入門後に自らの所属するカーストの義務を保持することになる。また、仏教において、伝統的な大乗仏教は波羅蜜理趣として真言理趣、すなわち密教の前段階に位置づけられることになる。

シヴァ教においては、諸宗教体系の階層的分類が、その宇宙論およびそれに関連した実践論に位置づけられることなる。シヴァ教はサーンキヤ学派の25原理にもとづく36原理（tattvaあるいはbhuvanādhvan）からなる宇宙構造を説いている。カシミールのシヴァ教の学匠アビナヴァグ

プタは、この宇宙構造にインドの諸宗教を当てはめている。それによるならば、仏教は14番目の原理であるブッディ（buddhi）に位置づけられている（片岡2010: 157）。

このような、宇宙構造は心のレベルの高まりに対応しているが、空海には、このような心のレベルの階層に対応した諸宗教の階層としての十住心の思想がある。今、下に十住心とそれに対応する宗教（宗派）を降順に記してみると以下のようになる。

10. 秘密荘厳心＝密教
９．極無自性心＝華厳
８．如実一道心＝天台
７．覚心不生心＝三論＝中観
６．他縁大乗心＝法相＝瑜伽行派
５．抜業因種心＝独覚乗
４．唯蘊無我心＝声聞乗
３．嬰童無畏心
２．愚童持斎心
１．異生羝羊心

この対応関係を見ると、その中にインドにおける実践体系としての三乗、４つの学派、そして東アジアにおける諸宗派が配置されているのが分かる。ここからは、その中のインド的要素に目を向けてみたいと思う。

3.1. 後期インド仏教における実践体系と密教の優越

周知のように仏教においては実践体系として３つもの、すなわち三乗が存在する。密教の綱要書においても事情は同様である。インド仏教におけるおそらくは最初の教理綱要書である、アドヴァヤヴァジラ Advayavajra（別名、マイトレーヤナータ Maitreyanātha）著『真理の宝環』（*Tattvaratnāvalī*）の冒頭部には以下のようにある。

> 実践体系（乗）には３つある。すなわち、声聞乗と独覚乗と大乗である。（中略）さらに大乗には２種類ある。波羅蜜理趣と真言理趣である[(2)]。

アドヴァヤヴァジラは、以上の実践体系の中で大乗の真言理趣が最上のものであることを説いている。そして、そのことを示すものとして、トリヴィクラマTrivikrama著『三理趣の灯明』（*Nayatrayapradīpa*）から以下の偈頌を引用している。

> 目的は［非密教の大乗のそれと］同一であるけれども、迷妄がないから、手段が多くあるから、難行でないから、能力の優れた者に［実践の］資格があるから、真言の教説は優れている[(3)]。

また、アドヴァヤヴァジラ自身も『真理の宝環』の終結部において、真言理趣が最上である理由を以下のように述べている。

> 一方、真言理趣は、非常に深遠であるから、深遠な理趣に対する強い確信を持った人を対象としているから、そして、四印などの成就を詳しく明かしているため、ここでは我々によっては解説されない[(4)]。

3.2. 後期インド仏教の学説・学派の状況

以上のように、アドヴァヤヴァジラは実践体系には三乗があることを説いているが、それぞれの実践体系がどの学説に関連付けられるかを説いている。後期インド仏教においては、毘婆沙師・経量・瑜伽行派・中観の学派が存在し、例えば、モークシャーカラグプタMokṣākaraguptaは著書『タルカバーシャー』（*Tarkabhāṣā*）の最終部において、これら４学派の教理の概説をしている。そしてこれらの学派は一般的に毘婆沙・経量・瑜伽行派・中観の順に高次の教理であるとされた。

このような教理の階層的分類は、教理綱要書だけに見られるものではない。後期インド密教を代表する経典である『ヘーヴァジラタントラ』（*Hevajratantra*）でも同様のことが説かれている。

> 最初に布薩を、次に十学処を与えられるべきである。ヴァイバーシカ学派の教義、そして同様に経量部の教義が教えられるべきである。次に瑜伽行派の教義を、その次に中観の教義を教えるべきである。すべてのマントラの体系を知った後、『ヘーヴァジラタントラ』［に規定されている実践を］始めるべきである(5)。

4．密教の優越性

以上、「竪の教判」について見てきたが、それでは『弁顕密二教論』に見られるような「横の教判」についてはどうであろうか？

まず、「能説の仏身の相違」に関して言うと、筆者は未だに「法身説法」に相当する用語、あるいは概念をインド密教文献中に見たことはない。ただし、ラトナラクシタRatnarakṣita著『パドミニー』（*Padminī*）（『サンヴァローダヤタントラ』に対する註釈書）に、密教の教理・実践が「仏を領域としている者に対しての教え」であるということが説かれている(6)。

次に、「所説の教法の相違」に関しては、類似の考え方がラトナーカラシャーンティRatnākaraśānti著『グナヴァティー』（*Guṇavatī*）に説かれている。

> タントラとは相続である。タントラには三種類ある。［すなわち］因タントラ、果タントラ、方便タントラである。そのうち、本性清浄なる無始無終なる心、すなわち菩提心、それが因であり、それが種子である。何の種子であろうか？菩提の［種子］である。正等覚が果である。なぜならば［それが］無上の果であるからである。その［菩提］はその同じ自性清浄の心の偶発的なすべての障害を滅することを特徴とする浄化である。それは諸仏の法身である。報身と

化身を包摂した無限の仏法の基体であるという意味である。それこそが諸仏の菩提であり、法身であり、大持金剛の位である[7]。

この引用では、因タントラ、果タントラ、方便タントラという３種類のタントラに関して、果タントラが法身、大持金剛位であると説いている。これは「果分可説」の考え方に接近していると思われる。

また「成仏の遅速」に関しては、密教経典の多くの箇所で「現世において成就する」「６ヶ月後に成就する」などの表現が見られることはよく知られている。

最後に、「教益の優劣の相違」についてはどうであろうか？「密教はいかなる種類の者をも救う」という主張に関しては、その典拠と考えられるものがインド密教文献中にあるものの、空海においては「普遍化」のプロセスが見られる。以下、『弁顕密二教論』の当該箇所を引用してみたい。

若彼有情不能受持契経調伏対法般若或復有情造諸悪業四重八重五無間罪謗方等経一闡提等種種重罪使得銷滅速疾解脱頓悟涅槃而為彼説諸陀羅尼蔵。（定本第３巻96）

【頼富本宏による要旨】もし、ある人が、経・律・論・大乗経典を受持することができず、あるいは、またある人が、もろもろの悪いおこないによって、殺生・偸盗・邪淫・妄語という男性出家者の４種の罪［四重］、もしくは、それら４つの罪と異性と接触する・異性関係に興味を持つ・同輩の重罪を隠すこと・罪の明らかな比丘と行動をともにすることという女性出家者の８種の罪［八重］と、父殺し・母殺し・高僧殺し・仏身を傷つけ血を流す・教団の和合を破るという重罪［五無間罪と、大乗の教説を非難することと、仏の教えを信じず、成仏の可能性を持たないなどの種々の重罪をつくることを消滅させ、速やかに苦しみからのがれ、機会が熟して直ちにさ

とりを求めるためには、そのような人のために、まさに密教の教えを説くのである。（頼富2004: 353）

上の引用が『真実摂経（初会金剛頂経）』（*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*）第１章「金剛界大マンダラ」の所説を下敷き（の１つ）にしていることは明らかである。以下、『真実摂経』の当該箇所（堀内校訂本 §§ 201–213）の和訳を提示する。

210. 次に、その金剛界大マンダラにおける、金剛弟子の入［マンダラ］を始めとした広大儀軌がある。

その場合、余すことない有情の領域を救済するといった、あらゆる利益と楽の最上の成就というなされるべき事柄のために、まず最初に、入［マンダラ］がある。この大曼荼羅に入ることに関して、その器量があるかないかを吟味してはいけない。それはどうしてであろうか？

211–213.（１）世尊たる如来たちよ！あるものたちは大いなる罪をなしているが、そのものたちがこの金剛界マンダラを見て、［そこに］入れば、すべての悪い存在領域（悪趣）を離れることになろう。

（２）世尊たちよ！すべての財、食事、飲み物、感官の対象に貪欲で、誓戒に敵意を持ち、準備儀礼などができない者たちがいるが、その者たちがこの［曼荼羅に］入れば、欲望の対象に従って、すべての望みが満たされることになる。

（３）世尊たちよ！ある者たちは、踊り・歌・笑い・妖艶な踊り・食事・娯楽を好み、すべての如来の大乗現証の法性を理解しないから、他の［宗教の］部族のマンダラに入り、無上の快楽と満足と喜びを起こすために、学処を恐れて、すべての如来の部族のマンダラに入らない。そのような、さまざまな悪しき存在領域に入る道に顔を向けている者たちには、すべての快楽と満足という最上の成就と、楽と心地よさの直接体験のために、そしてすべての悪しき存在領域

に入ることに向いている道を退けるために、金剛界大マンダラに入ることがふさわしい。

（4）また、世尊たちよ！ある者たちは、敬虔であり、すべての如来の戒・定・慧という最上の成就のための手段により、仏の悟りを求めている。そして［四］静慮と［八］解脱などの諸段階により努めて苦労している。まさにこのような場合に、このような者たちは、金剛界大曼荼羅に入るだけで、すべての如来となることが難なく［得られる］。他の成就は言うまでもない[8]。

この『真実摂経』の引用において、（1）罪人、（2）快楽主義者、（3）他のタントラの宗教に入信している者、（4）密教以外の伝統的仏教徒が金剛界大マンダラに入ること、すなわち金剛界大マンダラの灌頂を授かることで、それぞれに応じた功徳があることが説かれている。

この記述は、おそらくは当時のインド社会を背景にしているものだと考えられる。グプタ朝以降のインドでは、「インド的社会」が周辺部に拡張し、新しい統治者たちは、その統治システムとしてヴァルナ・アーシュラマ制度、いわゆるカースト制度を導入したことが知られている。このような社会的拡張において、新しくシュードラとして組み入れられた人々にも積極的に布教を行ったのがシヴァ教である。シヴァ教では、不可触民に布教を行っただけではなく、不可触民の阿闍梨がいたことも知られている（Sanderson 2009: 284ff.）。

上の『真実摂経』の背景には、このような状況の中、仏教側が異教徒など様々な種類の人々を引き入れるために、入門の敷居を低くしたことがあると考えられる。『真実摂経』は特定の異教の名前には言及していないが、『真実摂経』の灌頂儀礼に見られるアーヴェーシャ（憑依）の要素、入門者の実践する儀礼のエロティックな要素を考慮するとシャークタ的シヴァ教が念頭にあったと考えられる。

もちろん、空海の教判の背景にはこのような事情はない。歴史的・社会的文脈をもった教説が、空海においてどのように普遍化されていった

のかは、今後考えるべき問題であろう。

５．経典註釈の方法

次に取り上げたいのが経典註釈の方法である。空海の経典註釈においては、表面上の意味に隠された経典の真意を説く秘義的な解釈が見られる。例えば『法華経開題』における「如是我聞 evaṃ mayā śrutam」の解釈は以下の通りである。

> 如是我聞等五句成就亦有二意。顕句義如常説。密義此五句挙五仏三摩地。EVAṂ 者顕云如是則決定義。密云Ｅ仏性義VAṂ 無言説。即是大日如来垂拱無為以諸仏之帝王。自外一切仏則皆依此尊得存。此字則大日如来種子真言。MAYA (sic) 顕云我聞。密我者真如我無我大我即自在義。YA 者乗義。大自在乗者秘密真言乗義理。得秘密意者内外一切教法皆悉秘密乗。能乗此乗早詣所詣。詣即心王大我。ŚRUTA 顕云聞。密云ŚRU 字本体ŚA 字。ŚA 字即諸法寂静義。次TA 字如如義。如来本意寂一切衆生煩悩塵擾欲入真如寂静故次我乗明所灯寂如. . .（定本第４巻 193–194）

【現代語訳】「如是我聞」で始まる五成就にも２つの意味がある。顕教での意味は通常の通りである。密教での意味はこの五成就は五仏の三昧を表している。EVAṂ は、顕教では「以下のように」という意味であると確定している。密教ではＥは仏性の意味で、VAṂ は無言説の意味である。つまり、［EVAṂ という２文字で］大日如来は、自らは何もせず他のなすがままにまかせており、大日如来および他の一切の仏は皆この尊格に依存して存在していることを意味しているのである。［したがって］この［EVAṂ という］字は大日如来の種子真言である。MAYA (sic) は、顕教では「私は聞いた」という意味である。密教では真如の我、すなわち無我の大我であり、それは自在の意味である。YA は乗（実践体系）を意味している。大自

在乗とは秘密真言乗の意味であり、秘密の意味対象を理解すると、仏教・非仏教のすべて教法が悉く秘密乗となる。そしてこの実践体系に入ることができるならば、迅速に目的へと赴くことになる。赴くところは心王の大我である。ŚRUTAとは顕教では「聞く」という意味である。密教の解釈では、ŚRU字の本体はŚA字であり、このŚA字は諸法の寂静を意味する。次にTA字は真如という意味である。如来の意図するところは、すべての衆生の煩悩という塵や心の乱れ（？）を取り除き、真如の寂静に入れようとすることであるから、. . . . .

上の引用において、E字は梵字では逆三角形をしており、それが子宮を連想させることから、すべてのものの母胎としての仏性が想定されている可能性がある[9]。

mayāを「真如の我」とするのは、サンスクリット語でX-mayaという表現は、「Xからなる」「Xを自性とする」を意味することからの連想であると推測される。YAを「乗」とするのは、yānaからの連想であろう[10]。ŚRU字は、子音ŚAを媒介としてśānti/śānta（寂静）と関連付けられている[11]。TAはtathatā（真如）と関連付けられている[12]。

このような秘義的な解釈は、サンスクリット語による密教経典への註釈でも見られる。以下に引用するのは、『パドミニー』に見られる「如是我聞」の解釈である。

「E」字は法源である。「VAṂ」字は金剛である。「私によって（mayā）」とは結合である。「聞かれた（śrutam）」とは液体となることである。「ある時（ekasmin samaye）に」とは、「身語心による認識の停止を自性とする俱生歓喜の瞬間に」ということある。世尊とは大楽と不可分な身体を有する菩提心金剛である。「いらした」とは、すべてのものに遍充するものとしていた、ということである[13]（種村・加納・倉西 2016b: 137–138）。

まずevaṃに関して、E字は北インド系の文字が逆三角形に類似していることから、法源に関連付けられる。この法源はすべての存在の母体ともいうべきもので、図像的には逆三角形に表現される。これは子宮からの連想である。次に、「金剛」とは男性性器を表す隠語である。ここではVA字の形が男性性器を連想させることによる。

「mayā」は、冒頭のmという子音が共通することから「milana」（結合）関連付けられる。「śrutam」が「durtam」に関連付けられるのは、-rutamという音の一致によると考えられる。

全体としては、冒頭の一文により、二根交会のヨーガにより倶生歓喜を体験し、それがこの世界を遍満していると証得することを意味している、というのがラトナラクシタの註釈の意図である。

このような、経典の表にある文を構成する文字（あるいは単語）の音の要素を手がかりにして、経典の説く「真意」を抽出する手法は、空海の註釈にも見られることがらである。

6．結びにかえて

空海の活躍した時代のタントラの宗教の状況を始めとして、密教の包括主義、密教徒の主張する密教の優越性、経典の註釈方法というごく限られた要素ではあるが、インド密教からの視点で空海の教学・実践を見てきた。確認できたように空海の教学・実践には、「インド的密教要素」が多分に見られる。その一方で、それらの「インド密教的要素」が空海においては昇華され、壮大な体系を形成していることも事実である。今後は、より広い文脈の中に空海を位置づけることを通して、空海の独創性、あるいは空海思想の普遍性が考察されるべきであろう。

参考文献

一次資料

弁顕密二教論。『定本　弘法大師全集』高野山・高野山大学密教文化研究所, 第３巻, 74–110.

法華経開題（菟河女人）.『定本　弘法大師全集』高野山・高野山大学密教文化研究所, 第４巻, 182–196.

Guṇavatī, a commentary on the *Mahāmāyātantra*, by Ratnākaraśānti. Samdhong Rinpoche and Vrajavallabh Dwivedi (eds.) *Mahāmāyātantram with Guṇavatī by Ratnākaraśānti*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1992. Rare Buddhist Text Series 10.

Tattvaratnāvalī by Advayavajra. Gerloff 2019を参照.

Sarvatathāgatatattvasaṃgraha. 堀内寛仁. 1983.『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究：梵本校訂篇 上 ― 金剛界品・降三世品』高野山・密教文化研究所.

Hevajratantra. Snellgrove 1959を参照。

Padminī, a commentary on the *Saṃvarodayatantra*, by Ratnarakṣita. 第１章前半の校訂テキストについては、種村・加納・倉西 2016a、同和訳註については種村・加納・倉西 2016b、第22章前半校訂テキストおよび和訳については種村 2016を参照。

rNam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par byang chub pa rnam par sprul ba byin gyis rlob pa shin tu rgyas pa mdo sde'i dbang po rgyal po zhes bya ba'i chos kyi rnam grangs. Tibetan Translation of the *Vairocanābhisaṃbodhi*. Ota. No.126, *rgyud*, vol. *tha,* ff.115v2–225v2; Toh. No. 494, *rgyud*, vol. *ha,* ff.151v2–260r7.

二次資料

１．和文

片岡啓. 2010.「宗教の起源と展開」奈良康明・下田正弘編『新アジア仏教史１ インドⅠ 仏教出現の背景』東京・佼成出版社, 119–172.

加納和雄・李学竹. 2019.「Nayatrayapradīp：新出梵本の予備的報告」Journal of World Buddhist Cultures vol.2, 龍谷大学世界宗教研究センター, 125–140.

加納和雄・李学竹. 2020.「声聞による大乗の真実観批判：Nayatrayapradīpa梵文校訂と訳注（１）」『駒澤大学仏教学部論集』51, (77)–(102).

加納和雄・李学竹. 2021.「声聞の離欲と菩薩の大悲：Nayatrayapradīpa梵文校訂と訳注（２）」『駒澤大学仏教学部論集』52, (95)–(129).

種村隆元. 2016a.「東南アジア：インドネシアの碑文を中心に」高橋尚夫・野口圭也・

大塚伸夫編『空海とインド中期密教』東京・春秋社, 125–135.
種村隆元. 2016b.「Ratnarakṣita著 *Padminī* 第22章前半：Preliminary Editionおよび訳註」『現代密教』27, (73)–(91).
種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2016a.「Ratnarakṣita著 *Padminī* 第１章前半：Preliminary Editionおよび註」『川崎大師教学研究所紀要』1, (1)–(33).
種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2016b.「密教経典を権威づける：Ratnarakṣita著 *Padminī* 第１章前半和訳」Acta Tibetica et Buddhica 9, 123–144.
福田亮成. 2009.『新・弘法大師の教えと生涯』東京・ノンブル社。（新装・三訂）
頼富本宏. 2004（訳注）.「弁顕密二教論」宮坂宥勝（監修）『空海コレクション １』東京・筑摩書房。

２．欧文

Gerloff, Torsten. 2018. “Advayavajra’s Tattvaratnāvalī: A Newly Revised Critical Edition.” *Journal of Indian Philosophy*, 46, 805–843.
Isaacson, Harunaga. *2010. “Conceptions of Awakening (*bodhi*) in Indian Tantric Buddhism.” Handout of the lecture at Centre of Buddhist Studies, Hong Kong University, on September 14th, 2010. Downloadable from www.academia.edu.
Sanderson, Alexis. 2009. “The Śaiva Age: The Rise and Dominace of Śaivism During the Early Medieval Period.” In: Shingo Einoo (ed.) *Genesis and Development of Tantrism*. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, 41–349. Institute of Oriental Culture Special Series 23. = 永ノ尾信悟編.『タントラの形成と展開』東京・山喜房仏書林, 2009.
Snellgrove, David L. 1959. *The Hevajra Tantra: a Critical Study*. London: Oxford University Press. 2 volumes. Vol. 1. Introduction and Translation. Vol. 2. Sanskrit and Tibetan Texts.

註記

（１）このような密教の国際性は空海の著作からも伺うことができる。『秘密漫荼羅教付法伝』において、兄弟弟子の一人であるジャワ出身の弁弘が、胎蔵の秘法を求めて南インドに向かったところ、その秘法は不空が持ち去り唐に伝わっていること、そして恵果がその法を伝えていることを知り、唐に至ってその秘法を授かった旨を述べている（福田2009: 95–96）。

（２）*Tattvaratnāvalī*: tatra trīṇi yānāni, śrāvakayānaṃ pretyekayānaṃ mahāyanaṃ ceti. ... mahāyānaṃ ca dividhaṃ pāramitānayo mantranayaś ceti. (Gerloff 2018: 817)

（３）*Nayatrayapradīpa*: ekārthatve 'py asaṃmohād bahūpāyād aduṣkarāt | tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstraṃ viśiṣyate ||.

『三理趣の灯明』は近年そのサンスクリット語写本の存在が確認されており、李・加納により予備的研究ならびに声聞乗と大乗の対論の一部が出版されている（加納・李2019, 2020, 2021）。当該詩節はヴァリエーションを伴い、いくつかの文献に引用されており、それらからもサンスクリット語の原文が回収できる。この詩節が引用されている文献および詩節のヴァリエーションに関してはIsaacson *2010を参照。

（4）*Tattvaratnāvalī* : mantranayas tv asmābhir ihātigambhīratvād gambhīranayādhimuktikapuruṣaviṣayatvāc caturmudrādisādhanaprakāśanavistaratvāc ca na vyākriyate (Gerloff 2018: 837).

（5）*Hevajratantra* 2.8.9 – 10cd: poṣadhaṃ dīyate prathamaṃ tad anu śikṣāpadaṃ daśaṃ | vaibhāṣyaṃ tatra deśeta sūtrāntaṃ vai punas tathā || yogācāraṃ tataḥ paścāt tad anu madhyamakaṃ diśet | sarvamantranayaṃ jñātvā tad anu hejvaram ārabhet ||

（6）*Saṃvarodayatantra* 22.6ab: yogayoginītantrasya rahasyaṃ buddhagocaram | *Padminī* ad loc.: yogayoginītantrasyeti prathamārthe ṣaṣṭhī. buddhagocaram iti sattvam adhikṛtyeti śeṣaḥ, buddha eva gocaro yasyeti kṛtvā. etena mahāprājñasyārthāya mantranayadeśanety uktam.【和訳】「yogayoginītantrasya」という第６格は、第１格を意味して使用されている。「仏の領域とする」という語に「者に対して」という［語を］補うべきである。すなわち、［当該の語は］仏のみを領域とする者［というbahuvrīhi］を意味する。従って、偉大なる智慧を有する者のために真言理趣の教えがある、と説かれているのである。（種村2016b: (77), (82)–(83)）

（7）*Guṇavatī*: tantram iti prabandham. trividhaṃ tantraṃ hetutantraṃ phalatantram upāyatantraṃ ca. tatra prakṛtiprabhāsvaram anādinidhanaṃ cittaṃ bodhicittaṃ sa hetus tad bījam. kasya bījam. bodheḥ. samyaksambodhiḥ phalaṃ niruttaraphalatvāt. sā punas tasyaiva prakṛtiprabhāsvarasya cittasyāgantukasarvāvaraṇakṣayalakṣaṇā viśuddhiḥ. sā buddhānāṃ dharmakāyaḥ sambhoganirmāṇakāyasaṃgṛhītānām anantānāṃ buddhadharmāṇām āśraya ity arthaḥ. saiva buddhānāṃ bodhir dharmakāyo mahāvajradharapadam. (ed. p.3)

（8）*Sarvatathāgatatattvasaṃgraha* §210: athātra vajradhātumahāmaṇḍale vajraśiṣyapraveśādividhivistaro bhavati. tatra prathamaṃ tāvat praveśo bhavaty aśeṣānavaśeṣasattvadhātuparitrāṇasarvahitasukhottamasiddhikāryakaraṇatayā. atra mahāmaṇḍalapraveśe pātrāpātraparīkṣā na kāryā. tat kasmād dhetoḥ.

§211 santi, bhagavantas tathāgatāḥ, kecit sattvā mahāpāpakāriṇas, ta idaṃ vajradhātumahāmaṇḍalaṃ dṛṣṭvā praviṣṭvā ca, sarvāpāyavigatā bhaviṣyanti.

santi ca, bhagavantaḥ, sattvāḥ sarvārthabhojanapānakāmaguṇagṛddhāḥ, samayadviṣṭāḥ

puraścaraṇādiṣv aśaktāḥ. teṣām apy atra yathākāmakaraṇīyatayā praviṣṭānāṃ sarvāśāparipūrir bhaviṣyati.

§ 212 santi ca, bhagavantaḥ, sattvāḥ nṛttagāyavihārapriyatayā sarvatathāgatamahāyānābhisamayadharmatānavabodhatvād anyadevakulamaṇḍalāni praviśanti, sarvāśāparipūrisaṃgrahabhūteṣu niruttararatiprītiharṣasaṃbhavakareṣu sarvatathāgatakulamaṇḍaleṣu, śikṣāpadabhayabhītā na praviśanti, teṣām apāyamaṇḍalapraveśapathāvasthitamukhānām ayam eva vajradhātumahāmaṇḍalapraveśo yujyate, sarvaratiprītiuttamasiddhisukhasaumanasyānubhavanārthaṃ sarvāpāyapratipraveśābhimukhapathavinivartanāya ca.

§ 213 santi ca punar, bhagavato, dhārmikāḥ sattvāḥ sarvatathāgataśīlasamādhiprajñottamasiddhyupāyair buddhabodhiṃ prārthayanto dhyānavimokṣādibhir bhūmibhir yatantaḥ kliśyante, teṣām atraiva vajradhātumahāmaṇḍalapraveśamātreṇaiva sarvatathāgatatvam api na durlabhaṃ, kim aṅga punar anyā siddhir iti.

（9）これに関しては、後述の『パドミニー』からの引用と比較して頂きたい。

（10）Cf. *Vairocanābhisaṃbodhi*, chapter 24: kha cig tu ni chos thams cad la theg pa dmigs su med med do zhes ya'i gzugs kyis ston to || (P f.189v4, D f.224v5–6)

（11）Cf. *Vairocanābhisaṃbodhi*, chapter 24: kha cig tu ni chos thams cad zhi ba dang bral ba'o zhes sha'i gzugs kyis ston to || (P f.189v5, D f.224v6–7)

（12）Cf. *Vairocanābhisaṃbodhi*, chapter 24: kha cig tu ni chos thams cad de bzhin nyid dang bral ba'o zhes ta'i gzugs kyis ston to || (P ff.189r8–189v1, D f.224v2–3)

（13）*Padminī*, chapter 1: ekāro dharmodayā. vaṃkāro vajram. mayeti milanam. śrutam iti drutāpattiḥ. ekasmin samaya ity asādhāraṇe sakalakāyavākcittopalambhanivṛttisvabhāvasahajānandakṣaṇe. bhagavān bodhicittavajro mahāsukhāvyatibhinnamūrtiḥ. vijahāra sarvadharmavyāpisvabhāvatayāvasthitaḥ.（種村・加納・倉西 2016a: (16)–(17)）